

猫迫1号墳確認調査報告書



猫迫1号墳全景

2000

田川市教育委員会

序

本書で報告している猫迫1号墳は、田川地方の古墳時代中期における代表的な首長墓古墳として知られているセストノ古墳に隣接し、両者の関係が以前から注目されていました。

このたびこの古墳の学術的な価値をあきらかにし、将来の整備に備えることを目的として、規模・時期などについての確認調査を行ないました。この調査により、特異な初期横穴式石室を主体部とし、セストノ古墳に先行する時期の首長墓であることがほぼ確認されました。また、九州での初現期の可能性のある馬形埴輪や甲冑形埴輪および田川地方では最初の確認例である初期須恵器の出土など重要な資料を得ることができました。

この調査成果を、今後の古墳時代研究の資料として活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、調査を快くご承諾くださいました土地所有者の中村トミ子様及び管理者の井上哲夫様始め、県文化財保護課の皆様、発掘調査参加者の皆様他関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

2000年3月31日

田川市教育委員会

教育長 月 森 清 三 郎

例 言

1. 本書は、田川市教育委員会が国、県の補助を受けて平成11年度に行なった猫迫1号墳確認調査の報告書である。
2. 猫迫1号墳は田川市大字伊田3838番地に所在する。
3. 調査は、田川市教育委員会が主体となり、文化課石炭資料館主事田代健二が調査を担当した。現地調査の際に県文化財保護課秦憲二技師よりご援助を得た。
4. 遺構の方位は、すべて磁北である。
5. 写真はすべて田代が撮影した。
6. 遺構の実測図は、秦、田代が作成した。
7. 実測図の浄写は田代が行なった。
8. 本書の執筆・編集は田代が行なった。
9. 形象埴輪等遺物の多くについては、整理作業終了後に遺物編として刊行する予定である。

目 次

序

例言・目次

図目次・図版目次

第1章 調査の経緯と遺跡の環境	1
第1節 調査の経緯と調査体制	1
第2節 田川地方の古墳時代遺跡	2
第2章 猫迫1号墳確認調査の概要	4
第1節 立地、調査前の状況及び調査経過	4
第2節 遺構	4
第3節 遺物	18
第4節 古墳以前の遺構・遺物	18
第5節 猫迫1号墳の位置づけ	19

図 目 次

第1図 調査地周辺遺跡分布図	3	第10図 形象埴輪等出土状況	13
第2図 調査地位置図	4	第11図 石室天井石の一部(?)	14
第3図 猫迫1号墳平面図(調査前)	5	第12図 石室前庭部・墓道土層断面図	14
第4図 猫迫1号墳平面図(調査後)	7	第13図 石室実測図	15
第5図 墳丘・周堀断面図(南・北トレンチ)	9	第14図 猫迫1号墳出土遺物	17
第6図 試掘トレンチ土層図	11	第15図 古墳以前の遺構	18
第7図 南東突出部周堀断面図	11	第16図 古墳以前の遺物	19
第8図 周堀北部断面図	11	第17図 猫迫1号墳平面修復要素	19
第9図 南突出部断面図	13	第18図 猫迫1号墳石室天井部分復元案	20

図 版 目 次

図版1-1 猫迫1号墳遠景(北上空から)	図版5-1 石室北側壁
図版1-2 猫迫1号墳全景(北東上空から)	図版5-2 石室南側壁
図版2-1 猫迫1号墳全景(上空から)	図版6-1 石室玄門部段状部分
図版2-2 周堀北部埋土土層断面	図版6-2 石室床向
図版2-3 南突出部埴輪出土地点	図版6-3 石室天井石(北西から)
図版2-4 東突出部(北から)	図版6-4 石室外観(天井部復元後)
図版2-5 南突出部(西から)	図版6-5 石室前庭部(北西から)
図版3-1 東トレンチ埴輪検出状況	図版6-6 前庭北側壁基部(北から)
図版3-2 北トレンチ周堀検出状況	図版7-1 馬形・甲冑形埴輪出土状況
図版3-3 南トレンチ墳丘部分	図版7-2 甲冑形埴輪(小破片除去後)
図版3-4 北トレンチ遺構検出状況	図版7-3 甲冑形埴輪草摺部分・馬形埴輪鞍部分出土状況
図版3-5 石室前庭部埋土土層横断面	図版7-4 馬形埴輪鞍部分出土状況
図版3-6 石室前庭部埋土土層縦断面	図版8-1 猫迫1号墳出土須恵器
図版4-1 石室内部(奥壁側)	図版8-2 猫迫1号墳出土埴輪
図版4-2 石室内部(玄門側)	

第1章 調査の経緯と遺跡の環境

第1節 調査の経緯と調査体制

猫迫1号墳は、県文化課が1977年に刊行した『福岡県遺跡等分布地図（田川市・田川郡編）』に記載があり、主体部の石室が露出した状態で以前から知られていた。しかしながら、墳丘部分は深い葎で覆われ、墳丘形態等は明らかではなかった。

1996年に土地管理者により葎が伐採されて墳丘が露出し、かなり大型の墳丘であることがわかり、円筒埴輪片が採集されるなどセストノ占墳に連なる首長墓である可能性が考えられたため、福岡県教育庁筑豊教育事務所より、古墳の規模・時期などについて確認調査を行ってはどうかという示唆があった。国庫補助事業の重要遺跡確認調査として猫迫1号墳の調査を計画し、土地所有者と交渉したところ承諾していただいたので、1999年度に実施することになった。

現地調査は7月21日より開始し、規模・石室構造等を確認し、9月14日に一旦終了した。この間9月4日に現地説明会を行い、約100名の参加者を得た。

その後、県文化財保護課と協議した結果、遺跡の重要性からみてさらに多くの資料が必要であるとの結論に達した。県文化財保護課のご尽力により国・県からの追加補助を得られることになり、墳丘周囲および石室前庭部墓道部分の補足調査を行った。補足調査に当たっては、県文化財保護課より秦憲二主任技師を派遣していただき、調査にあたっていた。補足調査は10月18日から開始し、石室前庭側壁及び墳丘突出部の検出、形象埴輪の出土などの成果を得て11月25日に終了した。古墳は、調査終了後埋め戻して原状に戻している。調査体制は以下のとおりである。

田川市教育委員会	教育長	月森清二郎	石炭資料館館長	佐々木哲哉
	教育次長	園師利雄	係長	北川由美子
	文化課長	新具重信	主任	森本弘行
	課長補佐	林 晋一	主事	田代健二（調査担当）
福岡県教育庁文化財保護課			臨時職員	田中啓子（～12月）
	主任技師	秦 憲二（調査担当）		植木さち子（1月～）
			解説員	小野裕弘

調査参加者

衛藤妙子、岡田裕子、小野宮子、河野深雪、北崎優、中川恭子、中藤哲生、中村正己、中村陽典、
野畑里美、長谷川清隆、兵頭晃、三孝孝一（五十音順、敬称略）

なお、調査に際して、下記の方々からご指導・ご協力いただいた。記して謝意を表したい。

石山 勲、牛嶋英俊、小園 晃、小田富士雄、岸本 圭、児玉真一、重藤輝行、秦憲二、高橋克壽、
田村 悟、吉原義雄（五十音順、敬称略）

また、川崎瑞彦氏より採集遺物（須恵器壺・器台）を提供していただいた。記して謝意を表したい。

第2節 田川地方の古墳時代遺跡

田川地方は、周囲を山に囲まれた盆地状の地形をなしており、盆地内は低丘陵部分と彦山川・中元寺川・金辺川の形成した沖積低地部分とで構成されている。

田川地方で最古の首長墓級古墳とみられているのは、中元寺川流域の田川市猪位金に所在する位登古墳で、全長約60mの前方後円墳と考えられている。〔註1〕。位登古墳以降は古墳時代の全時期を通じて首長墓級古墳は中元寺川流域には見あたらない。田川地方全域をみても猫迫1号墳の川現まで、4世紀後半～5世紀前半頃の首長墓として明確なものは確認されていない。

5世紀中葉以降、猫迫1号墳・セストノ古墳〔註2〕と連続して首長墓級の古墳が上伊田台地に築造される。セストノ古墳に後続する首長墓は、上伊田台地上にはみられず、置き換わるように金辺川流域に夏古墳群の形成が始まる。夏古墳群については故 小方泰宏氏を中心とした一連の研究があり〔註3〕、首長墓系列がかなり明らかになっている。現在のところ夏古墳群で最古の古墳は9号墳で、続いて35号・3号・1号・21号が尾根上又は丘陵頂部に築造される。夏古墳群以外の横穴式石室墳は、1～5基程度の小グループで盆地内に散在している。田川地方で最後の首長墓級古墳とみられるのは方城町伊方所在の伊方古墳〔註4〕で、田川地方最大の複室横穴式石室を有している。

古墳時代集落については、まだ不明な部分が多いが、赤村合田遺跡〔註5〕、川崎町冥加塚遺跡〔註6〕、同 永井遺跡〔註7〕などで検出調査されている。

- 註1 田川市史編纂委員会編 1974 『田川市史 上巻』第二篇 先史時代
 註2 佐田茂 1984 『セストノ古墳』 田川市教育委員会
 註3 小方泰宏 1987 『田川地域考古学研究(1) 夏古墳群の歴史的位階』『郷土田川』第30号
 註4 柳沢一男 他 1999 『九州における横穴式石室の導入と展開』九州前方後円墳研究会
 註5 井上裕弘 他 1985 『合田遺跡』 赤村教育委員会
 註6 川添昭人・伊崎俊秋・飛野博文 1987 『冥加塚遺跡』 福岡県教育委員会
 註7 井上裕弘 1985 『永井遺跡』 川崎町教育委員会

1. 迫古墳、2. 迫横穴墓群、3. 迫遺跡、4. 宝塚遺跡、5. 草場遺跡、6. 三本松古墳、7. 人見古墳群、8. 神崎遺跡、9. 飯土井古墳、10. 城山古墳群、11. 玉仙山古墳、12. 後谷遺跡、13. 伊方古墳、14. 長谷横穴墓群、15. 野郎横穴墓群、16. 高崎古墳、17. 伊方遺跡、18. 大塚遺跡、19. 法華堂遺跡、20. 前村遺跡、21. 大穴遺跡、22. 清原横穴墓群、23. 夏古墳群、24. 夏古1号墳、25. 夏古21号墳、26. 若八幡古墳群・横穴墓群、27. クナタ山古墳、28. 一ノ鳥古墳、29. 香取古墳、30. 香取二ノ鳥遺跡、31. マツ原、32. 長畑遺跡、33. 宮原遺跡、34. 河内王墓(疑墓参考地)、35. 中津 横穴墓群(オビ横穴墓)、36. 一本松古墳群、37. 重ヶ丘遺跡、38. 重ヶ丘横穴墓群、39. 柳ヶ丘遺跡、40. セストノ古墳、41. 猫迫1号墳、42. 猫迫2号墳、43. 先洗山遺跡、44. 九州商業高校庭園遺跡、45. 夫婦塚横穴墓群、46. 香春神社古墳、47. 鹿ヶ原古墳群・横穴墓群、48. 上伊田遺跡群、49. 水島古墳、50. 横木横穴墓群、51. 上吉田古墳群、52. 上吉田横穴墓群、53. 弁ヶ原遺跡、54. 山伏塚、55. 上の原古墳、56. 上の原遺跡群、57. 小塚横穴墓群、58. 上の上遺跡群、59. 寺の芝原遺跡、60. 天神前遺跡、61. 天神山古墳群、62. 松ノ木田遺跡、63. 木殿遺跡、64. 門出遺跡、65. 下ノ田遺跡、66. 合田遺跡、67. 長谷池遺跡群、68. 向陽台山積層群、69. 和出古墳群、70. 和出横穴墓群、71. 松山遺跡、72. 馬山遺跡、73. 宮山遺跡、74. 雲山古墳群、75. 田原遺跡、76. 糸田城跡、77. 松ヶ迫1号墳、78. 松ヶ迫2号墳、79. 松ヶ迫遺跡、80. 出ヶ原古墳、81. 古賀ノ原遺跡、82. 原遺跡、83. 塚下古墳群、84. 上糸田遺跡、85. 高木公園古墳、86. 塚田古墳群、87. 若下古墳群、88. 香町古墳群、89. 岩屋古墳、90. 見立大池東古墳、91. 見立古墳、92. 銀ヶ迫横穴墓群、93. 角銅原古墳群、94. 角銅原遺跡、95. 弓削田原A遺跡、96. 弓削田原B遺跡、97. 弓削田原C遺跡、98. 貝倉神社古墳群、99. 見立遺跡、100. 放光寺山4号墳、101. 放光寺墓横穴墓群・古墳群、102. 放光寺墓6号墳、103. 大塚横穴墓群・大塚古墳、104. 長瀬横穴墓群、105. 成道寺古墳墓群A群、106. 成道寺公室内1号墳、107. 成道寺石棺墓群B群、108. 経路出土地、109. 成道寺公室横穴墓群、110. 横木遺跡、111. 天台寺跡(上伊田南端)、112. 天台寺瓦葺遺跡、113. 伊田區聖徳寺古墳群、114. 上伊田東横穴墓群、115. 森足横穴墓群・森足古墳、116. 小児塚出土地、117. 大下横穴墓群・伊加利1号墳、118. 伊加利2号墳、119. 伊加利3号墳、120. 城山第1地点、121. 城山第2地点、122. 岩龜八幡横穴墓群・伊加利4号墳、123. 伊加利5号墳・6号墳、124. 田中横穴墓群・古墳群、125. 六ヶ堂横穴墓群、126. 伊加利9号墳、127. 岡山古墳群、岡山古墳、128. 柳瀬山横穴墓群、129. 明神山横穴墓群、130. 鎌倉古墳群、131. 堀ノ原横穴墓群、132. 柳原横穴墓群、133. 大行寺横穴墓群、134. 長瀬横穴墓群、135. 長瀬横穴墓群・古墳群、136. 丸山古墳、137. 神奈山横穴墓群、138. 世永横穴墓群、139. 大行寺横穴墓群、140. 弓田原遺跡、141. 松木谷城跡、142. 大三神神社横穴墓群、143. 野上塚古墳、144. 上弓田原古墳群、145. 古賀古墳群、146. 下ノ田遺跡、147. 位登古墳、148. 位登横穴墓群、149. 羽衣古墳、150. 原原遺跡、151. 公門原遺跡、152. 馬加原遺跡、153. 猪位金古墳群、154. 山崎山古墳群、155. 山原古墳群、156. 越前原遺跡、157. 猪位金2号墳、158. 金田城跡、159. 水井遺跡、160. 弓田原1号墳、161. 藤原横穴墓群・古墳 Q



第1図 調査地周辺道跡分布図 (S-1/50,000) 【国土地理院「田川」行儀より】

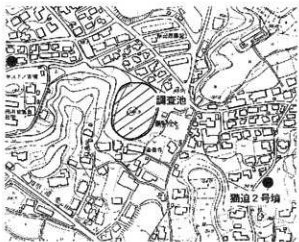
第2章 猫迫1号墳確認調査の概要

第1節 立地、調査前の状況及び調査経過

猫迫1号墳は、彦山川東岸の標高約4.5mの低丘陵上に所在しており、沖積平地面を広く見渡せる。墳丘は、後世の改変が著しく、当初の姿をとどめていない。墳丘のほぼ中央に石室天井石が露出しており、西側の二枚（一枚はまぐさ石）は盗掘により原位置を動いていた。

石室の中心を原点とし、主軸方向及び直行方向の墳丘裾部にトレンチを設定し、墳端の確認を行った。東トレンチでは明瞭に墳端を確認できたが、その他のトレンチではあまり明確ではなかったため、各トレンチの間にさらに4本のトレンチを設定し、墳端の確認を行った。さらに補足調査で、墳裾部分を7～8m幅で地山向まで掘り下げ、周溝及び墳丘南側と南東側で突出部を検出した。また、埴輪列検出及び盛上確認のため墳丘上に南北方向のトレンチを延長したが埴輪列は検出できなかった。

南側突出部の基部で馬形及び甲冑形埴輪が出土したほか、周溝のほぼ全周で円筒埴輪破片および若干の形象埴輪破片が出土した。



第2図 調査地位図 (1/3,000)

第2節 遺構

1) 墳丘 (第3・4図)

墳丘は南と南東に突出部を有し、トレンチ調査での土層断面観察及び周溝部分の調査結果から判断して、円丘部分は径約2.8mと考えられる。墳丘は、南北方向のトレンチ断面の観察によれば、地山を1.2mほど削りだして基部を形成した上に黄色土と黒色土を1.0cm程度の厚さで積重ね、さらに灰褐色土をやや厚く積み、さらにまた黄色土・黒色土の互層を積む非常に丁寧な盛上の状況がみられる。

墳丘周囲には幅5～6mの浅い周溝が部分的に残存している。周溝の深さはもっとも深い場所でも0.2m程度ときわめて浅い。耕作等により地山面が削平されているため、削平分を復元すれば4.0～5.0cmの深さになると思われるが、いずれにしても幅広く浅い周溝である。

南突出部は地山削り出しにより形成されている。西辺の一部のみが残存し、削平のため高さ及び全長、盛上の有無は不明で、また、東側の大部分が後世の擾乱により破壊されているため幅も不明である。周溝の底面から検出面までの高さは、2.0～2.5cmで、周溝との境は明瞭でない。

南東突出部は、南突出部と同様地山削り出しで形成されているが、周溝との境が明瞭に形作られている。長さは約5mで、幅は不明である。コーナー部は若干丸みを持つが、ほぼ直角になる。現状での高さは、周溝底面から1.5～2.0cm程度である。

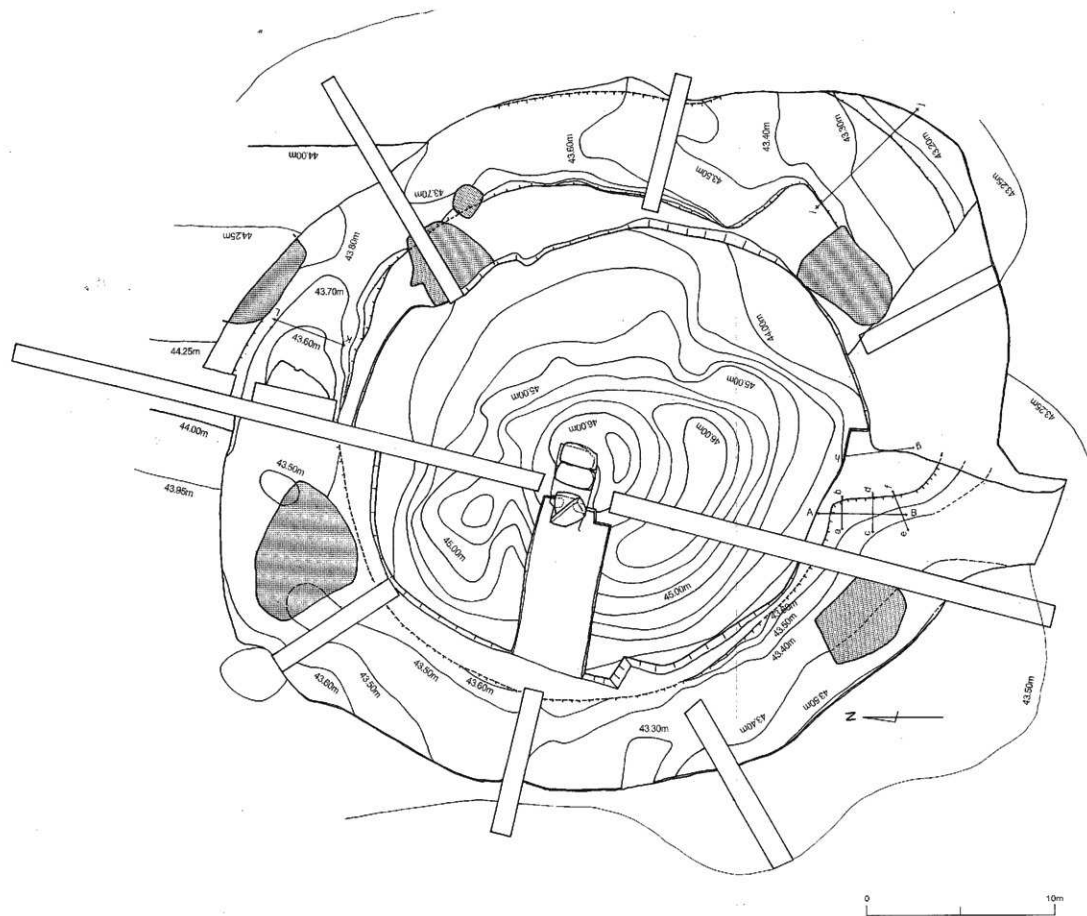
墳丘高さは現状では周溝底面から約2.7mであるが、地元の方のお話によると以前はさらに1mほど高かったとのことである。

2) 石室 (第13図)

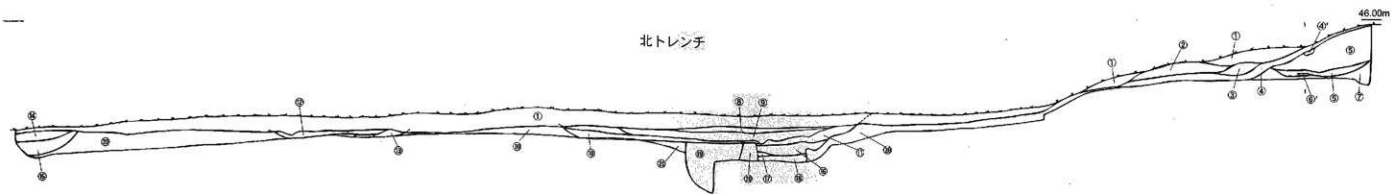
この石室には羨道はなく、低い前庭側壁のみがある。天井石は3枚で、玄門部にはまぐさ石（玄門天井石）がある。天井石の内、玄門側の一枚とまぐさ石は、盗掘の際に動かされていた。奥壁には天井までの2分の1弱の高さの腰石があり、その上面から天井までは割石積で壁面を構築している。両側壁の



第3图 猫追1号墳平面图【調査前】(S=1/200)



第4図 竊道1号墳平面図【調査後】(S=1/200)

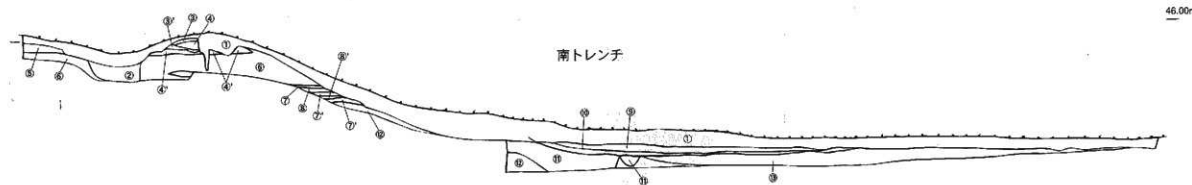


- ①灰褐色砂質土 (表土)
②暗褐色砂質土 砂質土
③灰褐色砂質土 (埋没後の表土)
④暗褐色砂質土 (埋没後の表土)
⑤暗褐色砂質土 埋没孔壁土
⑥暗褐色砂質土
⑦暗褐色砂質土

- ⑧暗褐色・黒色混合土
⑨黒色土
⑩暗褐色・黒色混合土 (やや粘質) 埋没埋土
⑪暗褐色・黒色混合土 (やや粘質)
⑫暗褐色粘質土 (外壁埋没埋土?)
⑬暗褐色粘質土
⑭黒色・黒色混合土 埋没孔壁土
⑮暗褐色砂質土

- ⑯暗褐色砂質土
⑰暗褐色土
⑱暗褐色土
⑲暗褐色土
⑳暗褐色土
㉑暗褐色土
㉒暗褐色土
㉓暗褐色土
㉔暗褐色土
㉕暗褐色土
㉖暗褐色土
㉗暗褐色土
㉘暗褐色土
㉙暗褐色土
㉚暗褐色土
㉛暗褐色土
㉜暗褐色土
㉝暗褐色土
㉞暗褐色土
㉟暗褐色土
㊱暗褐色土
㊲暗褐色土
㊳暗褐色土
㊴暗褐色土
㊵暗褐色土
㊶暗褐色土
㊷暗褐色土
㊸暗褐色土
㊹暗褐色土
㊺暗褐色土
㊻暗褐色土
㊼暗褐色土
㊽暗褐色土
㊾暗褐色土
㊿暗褐色土

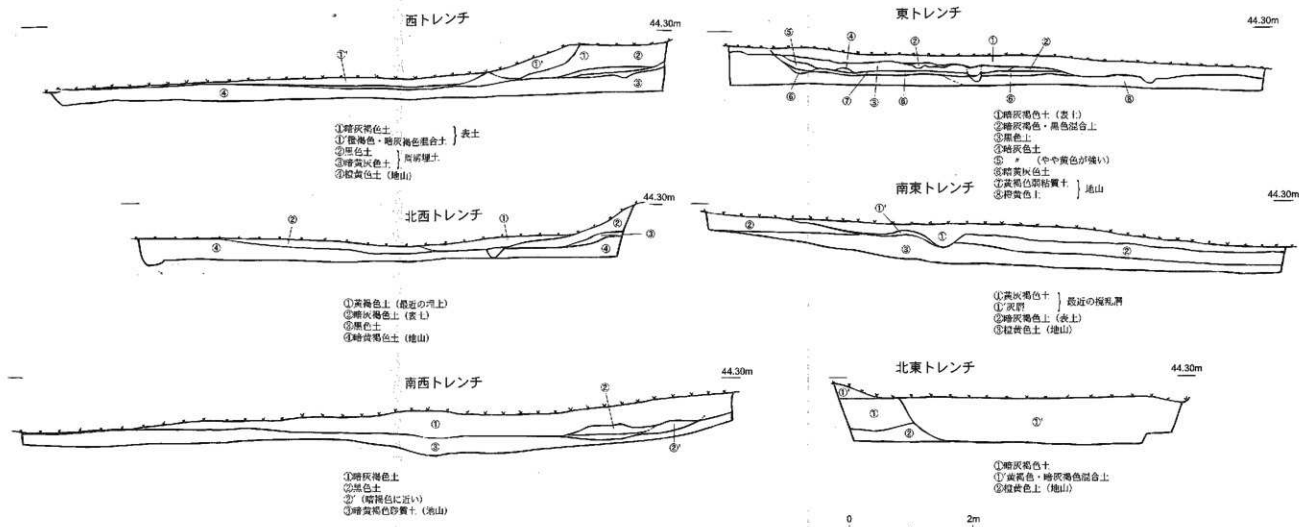
0 2m



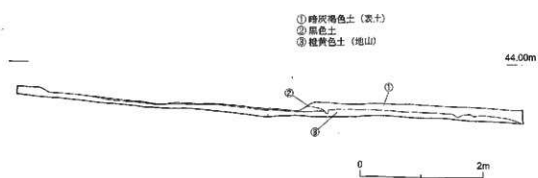
- ①灰褐色砂質土 (表土)
②暗褐色砂質土 (埋没孔壁土)
③暗褐色土
④暗褐色土
⑤暗褐色土
⑥暗褐色土
⑦暗褐色土
⑧暗褐色土
⑨暗褐色土
⑩暗褐色土
⑪暗褐色土
⑫暗褐色土
⑬暗褐色土
⑭暗褐色土
⑮暗褐色土
⑯暗褐色土
⑰暗褐色土
⑱暗褐色土
⑲暗褐色土
⑳暗褐色土
㉑暗褐色土
㉒暗褐色土
㉓暗褐色土
㉔暗褐色土
㉕暗褐色土
㉖暗褐色土
㉗暗褐色土
㉘暗褐色土
㉙暗褐色土
㉚暗褐色土
㉛暗褐色土
㉜暗褐色土
㉝暗褐色土
㉞暗褐色土
㉟暗褐色土
㊱暗褐色土
㊲暗褐色土
㊳暗褐色土
㊴暗褐色土
㊵暗褐色土
㊶暗褐色土
㊷暗褐色土
㊸暗褐色土
㊹暗褐色土
㊺暗褐色土
㊻暗褐色土
㊼暗褐色土
㊽暗褐色土
㊾暗褐色土
㊿暗褐色土

- ①暗褐色土
②暗褐色土
③暗褐色土
④暗褐色土
⑤暗褐色土
⑥暗褐色土
⑦暗褐色土
⑧暗褐色土
⑨暗褐色土
⑩暗褐色土
⑪暗褐色土
⑫暗褐色土
⑬暗褐色土
⑭暗褐色土
⑮暗褐色土
⑯暗褐色土
⑰暗褐色土
⑱暗褐色土
⑲暗褐色土
⑳暗褐色土
㉑暗褐色土
㉒暗褐色土
㉓暗褐色土
㉔暗褐色土
㉕暗褐色土
㉖暗褐色土
㉗暗褐色土
㉘暗褐色土
㉙暗褐色土
㉚暗褐色土
㉛暗褐色土
㉜暗褐色土
㉝暗褐色土
㉞暗褐色土
㉟暗褐色土
㊱暗褐色土
㊲暗褐色土
㊳暗褐色土
㊴暗褐色土
㊵暗褐色土
㊶暗褐色土
㊷暗褐色土
㊸暗褐色土
㊹暗褐色土
㊺暗褐色土
㊻暗褐色土
㊼暗褐色土
㊽暗褐色土
㊾暗褐色土
㊿暗褐色土

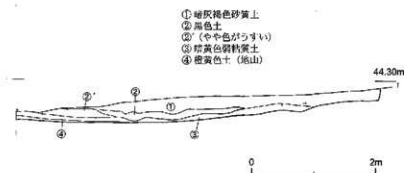
第5図 墳丘・周堀断面図【南・北トレンチ】 (S=1/80)



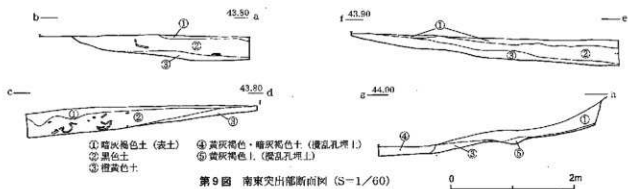
第6図 試験トレンチ土層図 (S=1/60)



第7図 南東突出部内溝断面 (S=1/60)



第8図 北部内溝断面図 (S=1/60)



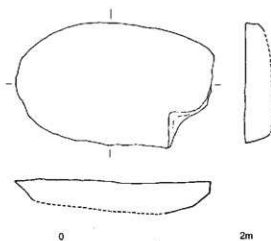
第10图 形象埧輪等出土状況 (S=1/20)

中央には天井まで達する大型の板石を縦長に用い、南側は奥壁側に腰石を用いるが、その他の部分は床面から天井までを割石で構築している。玄門部分は向袖式で袖石には縦長の板石を用いている。玄門部には2段の割石で構築された約20cmの高さの段がある。壁面は、4面とも持ち送りが見られる。袖石と側壁の間は、割石を充填しているが袖石の上端は側壁に接している。石室規模は、床面で長さ2.77m、前壁幅2.06m、奥壁幅1.97m、最大幅（奥壁から1/3部分）2.11m、奥壁部高さ1.62m、玄室天井高1.6m、玄門高1.08m、玄門幅は段状部分で0.55m、もっとも狭い部分で0.36mである。

床面には2~7cmほどの円礫が敷き詰められているが、奥壁に向かって左奥の1/3ほどが残存しているのみで大部分は盗掘により攪乱されている。石室石材のうち、大型の板石はすべて花崗岩である。割石は、緑色片岩と花崗岩を約2対1の割合で使用している。石室内からは、刀子1点と甲冑の破片かと思われる鉄片が若干出土した。

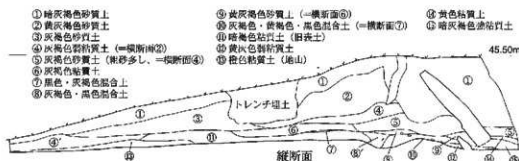
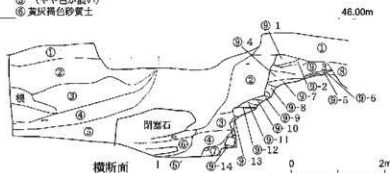
また、地元の方のご教示によると、付近の住宅に古墳から持ってきたという石があり、天井石の一部ではないかとのことであったので、略測させていただいた。参考として掲載するが、消滅した猫追2号墳の石材の可能性も考えられる。

墓道部分は盗掘による破壊が著しく、地山面近くまで掘削されていた。閉塞石基部から約1.2mの位置に地山面の立ち上がりがあり、ここから上方へのびる可能性が高い。追葬痕跡については、明確に確認できなかったが、閉塞石基部から約2.5mの位置に埋土層の立ち上がりが見られ、これが当初のものであれば追葬痕跡の可能性も考えられる。

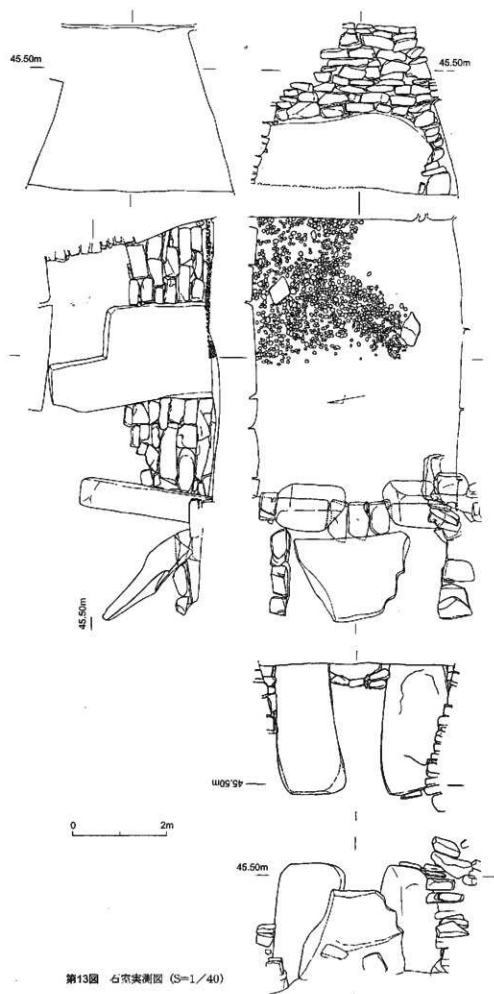


第11図 石室の一部(?) (S=1/40)

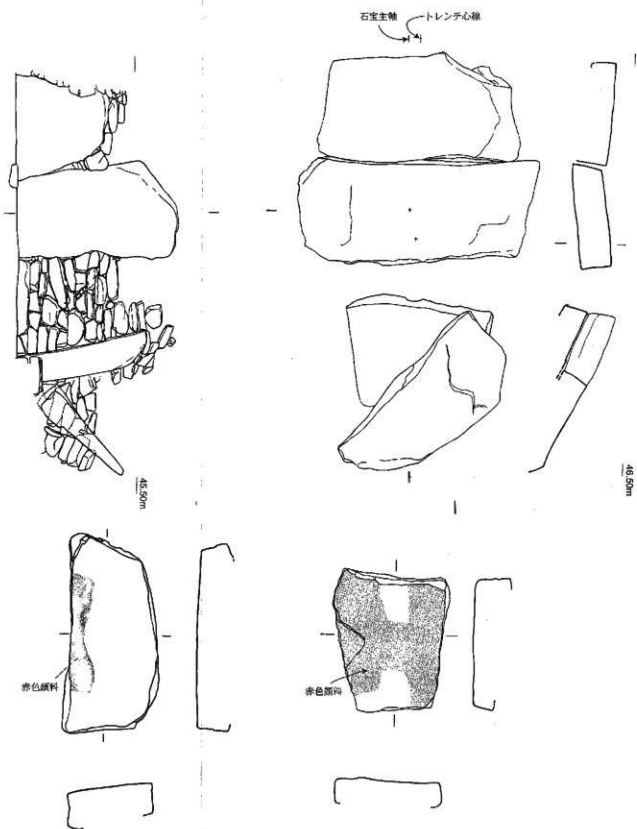
- | | |
|-------------------|-----------------------|
| ① 暗灰褐色砂質土 | ⑦ 黒色・灰褐色混合土 |
| ② 灰色砂質土 (=縦断面③) | ⑧ 暗灰褐色砂質土 |
| ③ 黄褐色砂質土 | ⑨ -1・4・10 灰褐色粘質土 |
| ④ 暗褐色砂質土 | ⑩ -2・5・7・9・11 黒色土 |
| ⑤ 暗灰褐色粘質土 (=縦断面⑥) | ⑪ -3・6・8・12・13・14 黄色土 |
| ⑥ (やが色が濃い) | |
| ⑦ 黄灰褐色砂質土 | |

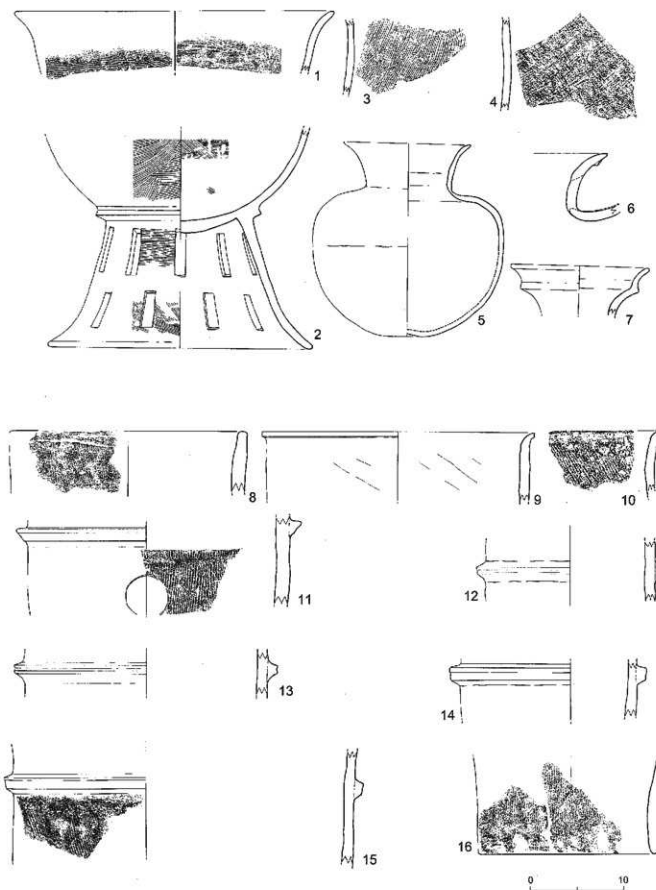


第12図 石室前庭部・墓道土層断面図 (S=1/40)



第13図 石室実測図 (S=1/40)





第14図 さいたま1号墳出土遺物 (S=1/4)

第3節 遺物

遺物の大部分は周溝内の埋土（黒色土）中から出土した。その他は、石室内から鉄器・鉄片が若干と石室前底部から土器片が若干出土したのみである。周溝内出土遺物でもっとも多いのは埴輪で、大部分は円筒埴輪である。形象埴輪では、南突出部基部からほぼ完形に復元できる馬形埴輪・甲冑形埴輪が出土したほか、周溝内埋土中から蓋形埴輪等が出土している。遺物の大部分は報告書作成時点でまだ整理中のため、ここでは、時期判定の資料として一部を掲載する。

1) 須恵器

甕・壺の口縁部は、外反して大きく開く。口縁端部の形状は、単純に丸く終わるものと、口縁部外面に突唇を施すものがある。胴部の調整は、完形の広口壺は内外面ともナデ調整であるが、小形甕又は壺の破片と思われるものには、外面細かい平行叩き目で内面ナデ調整のものがみられる。外面格子叩き目で内面に同心円文のある破片も若干みられる。自然釉は黒色である。

器台は短脚で初期の形態を示している。甕よりやや色が薄い。装飾文様が全く見られず、器面はハケ目の後軽くナデ調整が行われている。なお、1と2は別個体であるが、1も器台の口縁であろう。

2) 土師器（第14図7）

石室前底部埋土中から出土した二重口縁壺の口縁部である。淡黄灰色で外面はヨコナデ、内面は剥離しており調整不明である。

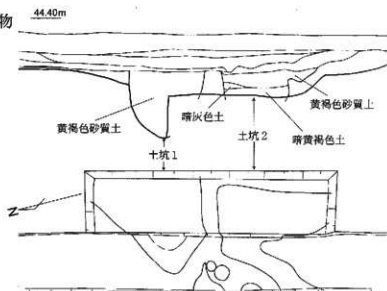
3) 円筒埴輪（第14図8～16）

周溝埋土（黒色土）中からコンテナ15箱分の破片が出土した。胎土の色調には赤褐色・淡黄褐色・黄灰褐色のものがある。丹塗りもみられるが、赤褐色のものには塗られていないようである。表面の調整は縦ハケで、横ハケはみられない。また、ハケ目をナデ消しているものもみられる。内面はナデ調整である。胎土は、淡黄褐色・黄灰褐色のものは粗砂を若干多く含み、赤褐色のものは比較的緻密である。大部分が土師質の軟質な焼成であるが、須恵質に近いものも少数あり、黒斑がみられないこととあわせて考えれば、窯を用いて焼成されたものであろう。

第4節 古墳以前の遺構・遺物

1) 遺構

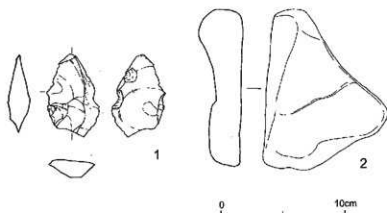
北トレンチで不定形の土坑、小ピットを検出した。今回の調査は古墳の確認調査が主であるので、内部の掘り下げは行わなかったが、土坑2については人工の遺構であるか確認のため一部を掘り下げた。土坑1は、断面で層状の堆積を確認したため、人工的な遺構と考えた。土坑2は、内部の埋土が単一の砂質土なので噴砂等の自然現象の可能性も考えられるが、埋土の土質が土坑1と大差ないので、一



第15図 古墳以前の遺構 (S=1/60)

0 2m

応土坑と判断した。小ピット等も人工的な遺構かどうかは確実でない。遺構中からは遺物の出土はない。



第16図 古墳以前の遺物 (S=1/3)

2) 遺物

①翼状剥片

墳丘上での表面採集遺物である。サヌカイト製で、いわゆる国府型ナイフ型石器の材料である。

②サヌカイト原石

墳丘東側の岡堀埋土黒色土中から出土。全く使用されていない。

③その他

図示していないが、太形蛤刃石芥の刃部、黒曜石（黒色・白色）の小剥片が若干出土している。

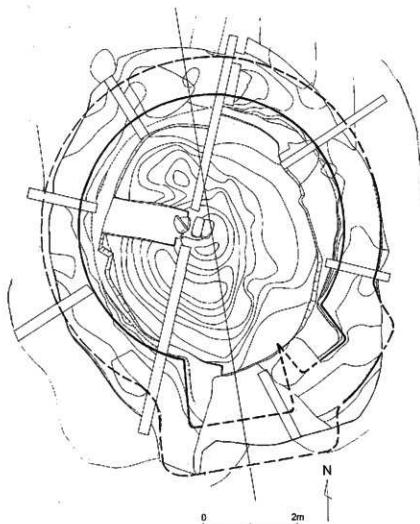
第5節 猫迫1号墳の位置づけ

1) 墳丘形態について

後世の改変が著しいため、墳丘形態の推定は困難を伴うが、南突出部を前方部、南東突出部を造出と解釈すれば、あくまで推定であるが第17図のような造出付きの帆立貝式前方後円墳と考えることも可能であろう。または、大小2つの造出を持つ円墳と考えるべきかもしれない。

2) 石室構造について

当古墳の石室は、北部九州初期横穴式石室の中で、平天井・無羨道の石室（重藤輝行氏の分類で北部九州型初期横穴式石室A類…以下A類石室と略す。〔註1〕）の範疇に入るものであるが、側壁中央部に天井まで達する板石を用いていることが、他地域の同時期のA類横穴式石室にない特徴である。セスノノ古墳の



第17図 猫迫1号墳平面形復元案 (S=1/400)

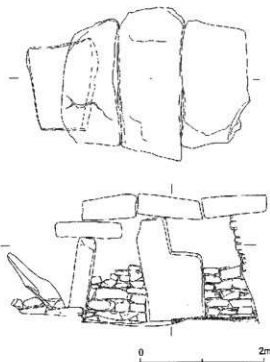
石室は、両側壁と奥壁を大型の板石で構築しており、他地域の石室が割石積みで構築されることと大きく異なるため、その系譜関係が注目されていた。セスドノ古墳石室の源流を朝鮮半島に求める考えが強くなりつつある〔註1〕が、重藤氏が指摘しているように、大形板石を用いる点以外の特徴は、A類石室の範疇に入るものである。猫追1号墳の石室は、一般的なA類石室とセスドノ古墳石室との中間的な位置にあると考えて良いのではないだろうか。大型板石の使用が朝鮮半島からの影響である可能性は考えられるが、A類石室の範疇において特定の技術を段階的かつ選択的に取り入れたものと解釈したい。猫追1号墳の石室の場合、小形の割石を得にくい花崗岩を多用せざるを得なかったという石材取得の困難が、大形板石を用いる技法を受け入れた一つの要因ではないだろうか。

3) 形象埴輪について

山川地方においては、埴輪の出土例は少なく、形象埴輪の出土例としては、夏吉2号墳から人物埴輪・馬形埴輪の一部が出土したと伝えられているのみであった〔註2〕。発掘調査によって出土したものは今回が最初であり、ほぼ完形に復元できるものは当古墳出土の馬形埴輪、甲冑形埴輪のみである。しかも、馬形埴輪は九州における初現期の例である可能性がある〔註3〕。

4) 築造年代について

円筒埴輪は、前方後円墳集成Ⅳ期に位置づけられる〔註3〕。須恵器は、器台、壺のプロポーションや甕の口縁形態などをみると初期須恵器の範疇に入るものであるが、叩き目を残すものもあり、初現期のものと比較すると、若干時期が下るものと考えられる。石室構造からみると、広川町石人山古墳と吉井町塚堂古墳前方部石室との間の時期に入るものと考えられる。これらからみて、現在のところ猫追1号墳の時期は5世紀中葉頃を考えている。ただし、5世紀代の古墳の実年代はまだ不確定な部分が多いので、以後も検討を続けたい。



第18図 猫追1号墳石室天井部分復元案
(S=1/60)

註1 重藤隆行 1999 「北部九州における横穴式石室の展開」『九州における横穴式石室の導入と展開』九州前方後円墳研究会

註2 福岡県教育委員会編 1977 『福岡県道筋等分布地図』福岡県教育委員会

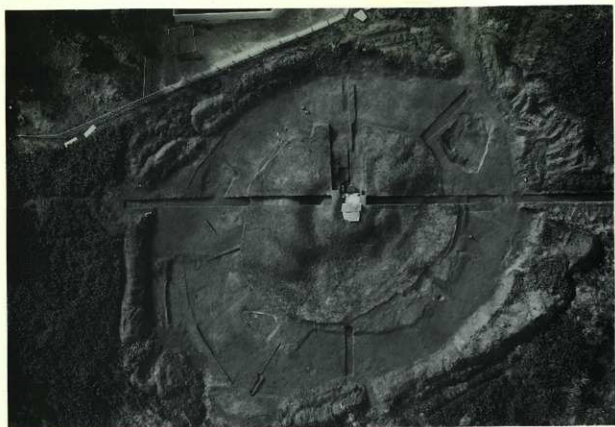
註3 高橋克壽氏、岸本 圭氏のご教示による。



1. 猫迫1号墳遠景（北上空から、手前が猫迫1号、写真中央はセスノ古墳）



2. 猫迫1号墳全景（北東上空から）



1. 猫追1号墳全景（上空から）



2. 北部周溝埋土土層断面



3. 南突出部埴輪出土地点



4. 東突出部（北から）



5. 南突出部（西から）



1. 東トレンチ墳端検出状況



2. 北トレンチ周溝検出状況



3. 南トレンチ墳丘部分



4. 北トレンチ遺構検出状況



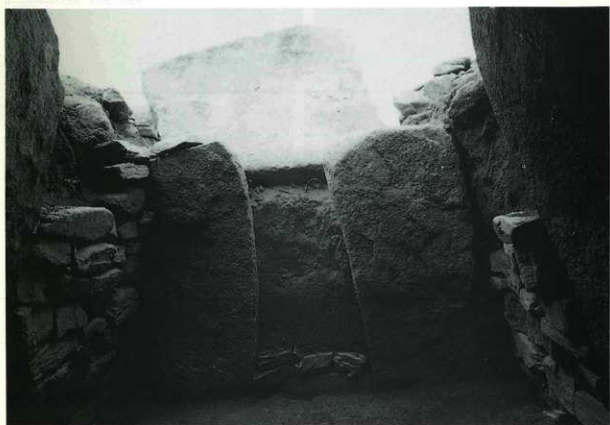
5. 石室前庭部埋土土層横断面



6. 石室前庭部埋土土層縦断面



1. 石室内部（奥壁側）



2. 石室内部（玄門側）



1. 石室北側壁



2. 石室南側壁



1. 石室玄門部段状部分



2. 石室床面



3. 石室天井石（北西から）



4. 石室外観（天井部復元後）



5. 石室前庭部（北西から）



6. 前庭北側壁基部



1. 馬形・甲冑形埴輪出土状況



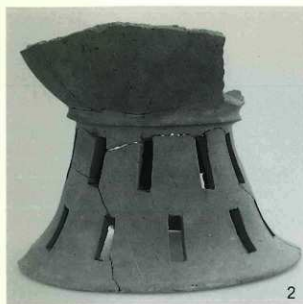
2. 甲冑形埴輪（小破片除去後）



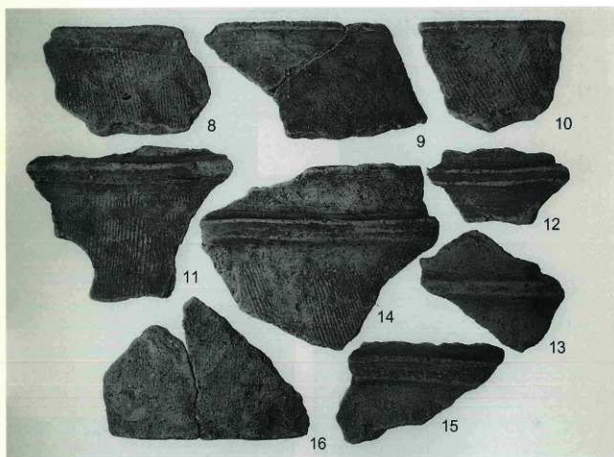
3 甲冑形埴輪草摺部分・馬形埴輪鞍部分出土状況



4. 馬形埴輪鞍部分出土状況



1. 猫迫1号墳出土須恵器



2. 猫迫1号墳出土埴輪

報 告 書 抄 録

ふりがな	ねこさこいちごうふんかくにんちょうさほうこくしょ							
書名	猫迫1号墳確認調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	田川市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第10集							
編著者名	田代健二							
編集機関	田川市教育委員会							
所在地	〒826-0031 福岡県田川市千代町6番3号							
発行年月日	2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東緯 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ねこさこいちごうふん 猫迫1号墳	ふくおかけん 福岡県 たがわし 田川市 おおあざいた 大字伊田 3 8 3 8	402061	060083	33° 38' 50" 009	130° 49' 46" 244	1999.7.21 1999.11.25	約1,200m ²	範囲確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
猫迫1号墳	古墳	古墳時代		造出付円墳 または帆立 貝式前方後 円墳		須恵器 土師器 形象埴輪 (馬形・甲冑形) 円筒埴輪		馬形埴輪は九州での 初現期のものの可能 性有り

田川市文化財調査報告書 第10集

猫迫1号墳確認調査報告書

平成12年3月31日

発行 田川市教育委員会
田川市千代町6番3号

印刷 ㈱松枝総合印刷
田川市大字夏吉453-2



馬形埴輪・甲冑形埴輪出土状況